

『少年の日の思い出』 ディベート

ローマ日本人学校における指導の意図

生徒の実態として、少人数であることのマイナス点なのかもしれませんが、お互いに気を使いながら自分の思うことを、みんなの前で表現しようとしません。書いたり、指名したりすると、それぞれがよい意見をもっているのですが、それを議論の場に出すことができません。ましてや相手の言うことに反対意見を述べて議論が深まることはありません。

こうした実態を踏まえて、ディベートの手法を用いて、論理的に考える力の育成と議論を通して考えを深める活動をさせたいと考えました。ディベートであれば、決められた時間に必ず発言しなければなりません。しかも、肯定側と否定側に分かれて行う発言が、必ずしも本人の意見と同じとは限りません。したがって、自分の立場を離れて自由に意見をたたかわせることができます。

読解学習におけるディベートの方向性

文学教材にディベートを取り入れる場合には、ディベートをすること自体を目的にしてはいけません。ディベートによって深まった考えを自分の言葉でまとめることが最終ゴールとなります。ディベートの場合、白か黒かの2つの価値しかありません。ところが、読解学習においては様々な意見が出てきます。そうしたことから考えると、ディベートは一つの手段にはなりますが、最適の方法とは言えません。読解学習を活性化し、生徒から意見を出させるという点においては十分に有効だと考えられます。

ディベートの論題

読解学習を進める中で生徒から出てきた疑問をもとに、2つのディベートの論題を設定しました。一つは、エーミールと僕の人物像や性格をとらえるために、次の論題としました。

A ちょうを収集する人としてエーミールは僕より適しているか

もう一つは、作品の主題を考えるために、次の論題を設定しました。

B 僕が寝台でちょうをつぶしたことは、事件の解決になったのか

個人立論の作成

ディベートの準備を進める前に、生徒一人一人が、それぞれの論題に対しての自分の考えをまとめました。

論題B

解決していないと考える。なぜならP220の10行目から11行目にそう書いてあるということは、僕は大人になった今でも、その事件は終わっていないと考えているからだ。ちょうをつぶし、ちょうを嫌ってみたところで、僕は何も解決していなかった。立ち直ることすらできずに、解決もできずに、僕は土俵の上で縮こまっている相撲取りになっている。弱いところもある人間だから、しかたがないと言えば、そこで終わってしまう。僕は変えていかないとらないのである。